いま伝えたい
――被爆者から

2015年・被爆70年
NPT再検討会議へ

〈7〉 孫を、教え子を再び戦場へ送るな

島根・江津市　小松マツエさん（85）

軍国主義に洗脳され

私は1929年4月に、広島県豊田郡南方村で4人兄妹の次女として生まれた。体格が良く、運動が大好きな子どもだった。小学校に入り、意味不明の教育勅語を頭を垂れて聞かされる時の苦痛は今でも鮮明に思い出すことができる。そんな私が戦争への道を再び歩み始めた日本の軍国主義に洗脳され、何の疑問も持たず鉢巻きを頭に結び、勤労奉仕に明け暮れるようになっていた。長じて国語の教員として子どもたちにかかわるようになって、私は改めて「教育」というものの影響力の強さを思い知ることになる。

女学校へ進学すると、1年時こそ授業があったが、そのうちに三原市の麻糸工場に学徒動員された。職種柄、女子ばかりの中に1人だけ朝鮮から連れてこられた大人しい男の人がいた。私たちは彼のことを「トッパー、トッパー」といってからかった。当時のことを思い出すと「真実を知らないでいる」ことの残酷さに、胸が締め付けられる。

慣れない寮生活、ノミ・シラミの不快さとともに、私たちを苦しめたのは空腹だった。頭の中は常に食べることでいっぱい。空襲警報が鳴るたびに夜中でも起こされ、防空壕に避難する生活。国民服はいつも着のみ着のままだ。服のまま野外で寝ることも日常茶飯事だった。空襲警報が頻繁に鳴るようになると、心身ともにそれに慣れてしまい、避難するのさえおっくうだった。それだけ戦況が逼迫してきても、私たちは戦争に負けるだなんてこれっぽっちも思わなかった。

江津支部主催の「平和展2014　～戦争体験を語り継ぐ～」（8月30～31日）で体験を語る小松さん

記憶が欠落するほど

1945年8月15日。「今日は作業は休み」とだけ言われ、寮で待機した。正午、「玉音放送」で日本の敗戦を知る。同室の級友三人で「日本が敗けた、どうして…」とわけもわからぬまま抱き合って泣いた。そしてその日のうちに自宅に帰った。

3日後。救護班として、広島の廿日市へ行くことになった。今でも強烈に覚えているのは、その時乗った電車の天井がギンバエで真っ黒だったことだ。救護所には床一面に負傷者が横たわっていた。私たちの仕事は、その人たちの枕元におにぎりとタクアン2切れを配って歩くこと。血膿で固まった傷口には白いウジがうごめいていた。異臭。人の声は全くない。その中でかすれた声で「水を下さい、水がほしい」と呼びかけられたが、聞こえないふりをするしかなかった。後は1日2回、亡くなった人をトラックへ運ぶ手伝いがあったが、これはあまりにも苛酷との引率教師の申し入れで除外された。あの頃、自分が何を食べ、どこで寝たのか全く記憶が欠落している。もう、精神は限界だった――。

命あればこその平和

私は今年、99歳の養母を亡くした。十分に看取り、天寿を全うした死ではあったがそれでも名状しがたい喪失感に言葉を失った。私が16歳の時、暑いヒロシマで見た異臭漂う汚れた衣服、口元に含む水さえも与えられずトラックで運ばれていった人たち。その一人ひとりに家族があり、人生があったはずだ。その人たちの無念を、無駄にしてはならない。私はその一念でその後の人生を生きてきた。自分の大切な孫を、教え子を再び戦場へ送るな。教職を退いてから、しばらく忘れていたこの言葉。今、またそれを叫ばねばならない時がきている。命あればこその平和だ。そのことを、次の世代に伝えたい。